

雪中章(一帖第五通)

そもそも、^{とうねん}当年よりことのほか、^{かしゅう}加州^の能登越^と中^{えっちゅう}兩^{りょう}三箇^{さん}国^がのあい
だより、^{どう}道俗^{せう}男女^{なん}群集^にをなして、この^{よし}吉崎^{ざき}の^{さん}山中^{ちゅう}に、^{さん}参詣^{けい}せらる
る^{めん}面々^{めん}の^{しん}心中^どのとおり、^{こころ}いかがと^{こころ}心もとなく^{そう}候、^{らう}そのゆえは、ま
ず、^{とう}当流^{りゅう}のおもむきは、このたび^{ごく}極樂^{らく}に^{おう}往生^{じょう}すべきことわりは、
他^た力の^{しん}信心^{じん}をえたるがゆえなり、しかれども、この^{いち}一流^{りゅう}のうちにお
いて、^{しか}しかと^{しん}その信心^{じん}のすがたをもえたる人、これなし、かくのご
とくのやからは、^いいかでか^{ほう}報土^どの^{おう}往生^{じょう}をばたやすくとどべきや。
一^{いち}大事^{だい}というはこれなり、^{さい}幸いに^ご五里^り十里^{じゅう}の^{えん}遠路^らをしのぎ、この
雪^{ゆき}のうちに^{さん}参詣^{けい}の^{こころ}こころざしは、^いいかように^{こころ}こころえられたる^{しん}心中^ど
ぞや、^{せん}千万^{ばん}心もとなき^し次第^{だい}なり、^し所詮^{しよ}以前^{せん}は、^いいかようの^{しん}心中^どに

てありというとも、これよりのちは、^{しんじゅう}心中にこそるえおかるべき次第^{しだい}
をくわしく申^{もう}すべし、よくよく耳^{みみ}をそばだてて聴聞^{ちやうもん}あるべし、その
ゆえは、他^{たうき}力の信心^{しんじん}ということを、しかと^{しんじゅう}心中にたくわえられ候^{そうら}い
て、そのうえには仏恩報謝^{ぶつとんほうしゃ}のためには、行住坐臥^{ぎやうじゅうざが}に念仏^{ねんぶつ}を申^{もう}さ
るべきばかりなり、このこそるえにてあるならば、このたびの往生^{おうじやう}は
一定^{いちじやう}なり、このうれしさのあまりには、師匠坊主^{ししやうぼうず}の在所^{ざいしょ}へもあゆ
みをはこび、こそるえしをもいたすべきものなり、これすなわち当流^{とうりゅう}
の義^ぎをよくこそるえたる、信心^{しんじん}の人^{ひと}とは申^{もう}すべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

文明五年二月八日

雪中章の大意

このところ、加賀・能登・越中などの国から、僧侶も在家の人
も、男も女も、たくさんの方がこの吉崎に参詣されますが、その人
たちがどういってお気持ちなのかと気がかりです。

というのは、浄土真宗のみ教えでは、このたび浄土に往生する
ことができるのは、他力の信心を得ることによるからです。しかし
信心をたしかに得た人は見あたりません。そうしたことでは、どう
して浄土に往生することができましようか。五里十里という遠い
道をなんとか踏み越えて、この雪の中を参詣されたのは、どうい
うお気持ちなのだらうかと、はなはだ気がかりなことです。

そこでこれからどのように心得なければならぬかということ、他

力の信心のいわれをしっかりと心にいただき、そのうえで、仏恩報謝のためにいつも念仏すべきなのです。このように心得たならば浄土往生は定まるのです。その喜びからであれば、師とされる僧侶の寺へ出向いて施しをなさるのもよいでしょう。このような人を浄土真宗のみ教えをよく心得た信心の人というのです。